
北へ・・・

Haruka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

北へ・・・

【Nコード】

N1333T

【作者名】

H a r u k a

【あらすじ】

2012年12月22日・・・人類滅亡の日。

孤独なハーフ女子高生である 土方カンナ《ひじかたかな》は

すべての最後を見届け、逝く・・・はずだった。

だが、彼女は生きた。

武士の時代、江戸時代。

彼女の行った時代、そこは幕末の京。

尊皇派と佐幕派に分かれ、対立しそれは時間が経つとともに拡大していく。

そんな争いの中、祖先と出会い、歴史上の人物達と出会い、別れ、そして、彼女は見つけてしまう。

仲間との友情、信頼、そして、熱くなるほどの愛。

彼女は得意とする剣道を扱い、この世を切り抜け、愛する者のために、友のために戦う。

この激戦の中で、孤独だった彼女が手に入れた物とは・・・

そして、この時代の人間ではないとうに死んでいたはずの彼女の最期とは・・・！

プロローグ

2012年12月22日 午後11時59分59秒 人類は滅亡した・・・

プロローグ

1年前から、何となくだけどニュースでやってた。

・・・よく、・・・わからないんだけど。

何にも、信じる気なんて無かった。隕石だとか、マヤの予言だとか。

隕石って、まだ観測されてないじゃん。

予言なんて、正確だっていう根拠、ハッキリしてないじゃん。

どこに、信じる要素が入ってるんだ！？ って、思ってた。

でも、実際に12月に入ると、なんだか太陽の様子がおかしくなってきたみたい・・・。

実感がわかなくて、無駄な時間を過ごしている気がする。

世界中では、パニックが起こってるって言っているのに。

馬鹿馬鹿しいと思う。 強盗とか、無差別殺人とかが急に増えて。

この現代は、臆病者ばかりだ。 死という選択肢を持ってない。

だから、恐れて暴れ出すんだ。

国が正式に発表すると、もっとパニックに陥った。

今まで、音沙汰が無かった両親が、馬鹿みたいに帰ってきて、あたしに抱きついて泣く。

何もかもが、今更過ぎる。

ずっと、あたしと共にあってくれたのは、この勇気ある刀だけ。

だって誰もが自分を一番に優先して生きる。だから、友達なんてのは作らない。

自分が不利になったとたん切り捨てられるだけだから。

それに対して、この刀は過去、主を信じて戦っていた。 勇気ある

この刀を誇りに思う。

だから、最後まで傍にるのはこの刀だけ。

みんな、地下に潜り込んで。 入りきれないからって、争ったりして。

でも、あたしはなるべく山の頂に近いところへ。

よく、見たかったから。 見届けたかったから。

この刀と共に 終わりを見たかった。

もう、終わるというのに、夜空は輝く星でいっぱい。

違う・・・最後だから、・・・思いっきり輝くんだ。

とうとう、滅亡のとき。

白くまばゆい光が地球全体を包み込んだ。

「・・・ありがとう。兼定」

と同時に、腕時計の針が動くのをやめた。

今日、あたしは、この北海道で死んだ。

勇敢で大切な友と一緒に・・・

時代

あたしは、死んだ・・・はずだった。

く時代く

人類の終わりの時、白い光が目に入り込んで、世界もろとも無くなった。

もちろん、あたしも。

でも・・・今、目の前にあるのは・・・無くなったはずの、人々と町。

だいぶ、昔くさい気はするけれど。

「おい、お前。 異国の者か？」

・・・異国？・・・。

「半分だけ、そうよ。・・・それが何？」

母が、イタリア人で、あたしは母親似。

だから、日本人ってよりは、イタリア人ってほうが正しいのかも。

まあ、親になんて、似たくはなかったけど。

「・・・異国は、打ち払うべきだ。」

突然、あたしの目にそいつの腰にあるものが映った。

ああ・・・。

こんな所で、習っていた剣道が役に立つなんてね。思ってたなかった。

あたしの頭上ではキラリと鈍い光がはなたれた。

条件反射で、手に持っていた刀の鞘で刃を受け、素早く払った。

ここがどこなのかも分からないって言うのに、あたしは走り出す。

ただ、いきなりここに來た理由が知りたくて。

そのためには、ここで生きなきゃいけないくて。

謎の少女

??? side

・・・何だろうか。あの女子・・・。

（謎の少女）

私は、少し買い物をして家へ帰ろうかと町の中を歩いていたところなのだが、

突然何かが、向こうから走ってきた。

すぐに女子だとはわかった。なんだか、不思議な雰囲気をもった子だ。

今日は天気が良くて、彼女の金髪はきらきらと太陽の光を反射していた。

それに、異国の服に似ているようなものを身にまとっている。純粋に興味がわいてね。

ちょうど、浪士に追いかけていたようだったから少しだけ、助けてあげてはと思った。

そう思っていたのに、彼女は、私の目の前で足を止めて浪士に向き合った。

「しょうがないわね。・・・相手してあげる。もう、逃げないんだから。」

なんとも、気の強い。

おかげで、余計に興味がわいてしまった。

「君は、避けててもらえる？」

「嫌よ。邪魔しないで。他人の手なんか借りたくないのよ。」

彼女は、私の目をちゃんと見て言った。

目が、見惚れてしまうほど美しかった。茶色っぽいが、金色がかっている。

その目を見ると、血で染まってきた身体全身が、心が洗われていくようだ。

「うああああ！！」

いきなり、浪士が、彼女に斬りかかった。

私は、間に合わなかった。助けることなど、出来なかった。

そう思った矢先、高い金属音がした。

彼女は、いつの間にか刀を抜いて浪士の刀をはじき飛ばしていた。

居合いだ。　彼女は、剣が使えるのか？

・・・刀は、妖しくも美しく輝いていた。

彼女が使うからだろうか。　剣が生きているようだ。

浪士は、手がしびれて小刻みに震えていた。

そいつは、彼女を恐れたのか走って逃げていった。

「ちょっと、その人。」

「あ・・・ああ。なんだ？」

私は彼女の、刀をはじき飛ばす程の力に驚いていた。

「今は、何年？それと、ここはどこ？」

よく、わけの分からない事を尋ねてくるが、きっと困っているのだ
ろうと応えてやった。

「今は、元治元年の6月5日だが？」

「そう。」

そう言って、彼女は刀を鞘に納め、歩き出した。

だが、私はどうしても気になった。

「少し、待ってくれないか？　その格好では、目立つだろう？　おいで。」

彼女も、目立つと思ったのか、渋々ついてきた。

彼女は、女子にしては、私には及ばないが背が高く、足や腕は細かった。

しかし、なかなか良い体つきだ。

・・・男だとしても、このような事を思ってしまうのが恥ずかしい。

彼女は、無表情で無言だった。

人形の様だと思う。　肌は、日本人には無い、異人独特の白さと透明さがあった。

だが、どこか日本人らしさも持っている様に感じる。

何なのだろうか。　彼女に、何があったのだろうか。

会合

今、カンナは窮屈な思いをしていた。

これも、あの訳の分からない男のせいである。

「ちょっと、何すんのよ。きつい・・・。」

・・・

「どうだい？」

男はひょっこりと顔を覗かせた。

・・・目が輝いている。

「ああ。・・・やっぱり、君にはその着物が似合ってる。綺麗だよ。」

カンナは、目を細め、さらに眉間に皺を寄せた。

着物の帯を思いっきりしめられ、窮屈で仕方がないという顔だ。

「・・・あんた嫌い。・・・じゃ。この着物、ありがと。」

着物を着たままその呉服屋を出ようと一歩ふみだす。

しかし、2歩目はかなわなかった。

「ちょっと、まちなよ。着物を贈ってあげたんだから、すこし付き

合って。」

男は、ニヤリと笑った。

カンナに、この男の感情は読めなかった。

「何処？」

「ちょっとした宿に。これから、大事な集まりがあるんだよ。」

（・・・幕末6月5日の集まり・・・？）

カンナは、歴女としての知識を掘り返していた。

「あたし、カンナ。あんたの名前って、桂小五郎？だったり。」

男は、表情も変えずにくすりと笑った。

「さあ？ どうだろうねえ。 僕もわからないよ。どれが、本当の名前かなんて。」

（こんなホストみたいな男が、後の木戸孝允？
・・・維新の三傑さんけつの？）

「まあ、だとしたらちようにいいかも。 会いたい人が居て。」

「そう？ 良かったよ。」

桂は、少し疑うような目つきをしたが、すぐに元へと戻した。

カンナは、確信していた。

この集まりが、尊皇派の会合であり、

企てている計画が、失敗に終わることも。

そして、カンナの持つ刀の持ち主が現れることも全て。

（桂には悪いけど、あたしは、佐幕派なの。尊敬してるひとがそうだから。）

着物の借りは、いつか。）

宿に着いて、カンナはひとり、部屋の隅で座り、刀を見つめていた。相変わらず、変な視線は感じるが気になどしない。

（やっぱり、あの池田屋事件か。・・・ちょっと危ないかも。）

カンナは、静かに立ち上がり、廁だと言って少し抜けた。

外へ出て、周りの様子をうかがい、ある男と目が合う。

見かけは商人。・・・でも確か・・・

「ちょっと、そこの薬屋さん。あたしに薬をうってくださいな。」

カンナがそう言うと、男は、じんわりと汗をかきながら来た。

「今、胃が痛い。それに効くものはある？」

「へえ・・・。」

男は、カンナを敵だと思いこんでいる。

カンナは、薬を受け取って、その薬の包みにボールペンで何かを書き出した。

―会合は池田屋。副長へ報告を。―

男は、目を丸くしてカンナを見た。

カンナは、頷く代わりに瞬きをする。

そして、この文を残さないために、水も無いまま薬を口に放り込み、包みは粉々に破って、男の頭の上に散りばめた。

「見て。紙吹雪。・・・きれいでしょ。」

久しぶりにカンナは笑った。

男の、驚いてから一気に気の抜けた顔が面白くて。

「ああ、ごめんなさいね。お仕事の邪魔しちゃったかしら。」

「いえ。ありがとうございました。」

カンナは、早歩きで去っていく男の後ろ姿に手を振った。

（良かった。ちょっと、安心。・・・後は、待つだけか。）

だんだんと日が暮れ、志士達も酒で酔ってきたようだ。

そんな時でも、刻一刻と、あの歴史的大事件は迫っていた。

舞い込んだ蝶

「あの人の予想が珍しく外れましたね。それに応援も来てないみたいですよ。」

「・・・ああ。仕様があるまい。行くぞ。」

宿の外には、浅葱色をまとった者達が数名。とうとう、このときがやってきてしまったのだ。

宿内は、相変わらず・・・いや、先にも増して泥酔者が増えていた。

それにカンナがため息を吐くと、桂がふと立ち上がり、外へ出て行く。

「ちょっと、逃げるの？」

「まさか。周辺の見回りさ。」

桂は、また読めないような笑顔を作り、さっさと出て行った。

この男は、見回りをしていてたまたま異変に気づき、一人逃げたのか、

それとも、もともと気づいていて仲間を置いて逃げたのか。わからない。

だが、これだけは確かだろう。

桂は、ここに戻らない。カンナさえも置いていく。

しかし、それとは反対に、桂はこっそり戻り、手招きでカンナを呼んだ。

そして、何も言わずに足早に手を引き、歩き出した。

「やめて。・・・今更なによ。」

「あの新選組がここに討ち入ってくる様だ。逃げる。」

簡潔に内容を言って、また歩き出すのだが、カンナは桂の手を振り払った。

「とんだ腰抜けね。・・・」

カンナは反対方向に堂々と前を見据え、男顔負けの度胸を見せつける様に一歩一歩を踏みしめる。

桂は、舌打ちをしてカンナに背を向けた。

この男にとって、カンナのこの行動は悔しいものであったことだろう。

女子に腰抜けと言われ、女子は逃げようとする自分を否定するかの様に

堂々とした背中を見せつける。

（・・・っ・・・ああ。僕は腰抜けさ。

だが、この時代では逃げる者がより長く生きることもある。それに、僕はここで死体をさらすわけにはいかないのさ。）

桂は、カンナの雰囲気や性格を大層気に入っていたのだがほんの短い時間しか見ることは敵わなかった。

桂が見たカンナの刀を持つ姿は、美しくも勇ましく、

戦場に向かう武士と同等にたくましかった。

裏口から宿を出て、なるべく遠くにと走っている最中、太い男の声を遠くで聴いた。

「新選組だ!!! 宿内を改める!!!」

（かなな、あいつらを頼んだよ。）

しかし、悲しいことに桂のこの願いは聞き入れられない。

この男は、思い違いをしていた。

カンナは佐幕派であり、尊皇派ではない。

故に、桂の仲間ではなく、新選組につくことになる。

舞い込んだ蝶 其の弐

カンナは、太く男らしい声を聴いた。

「新選組だ！！！宿内を改める！！」

口元は緩むばかりである。

カンナは心を弾ませていた。

なぜなら、とうとう会いたかった人物と対面することが出来るからであった。

浪士たちは、新選組のかけ声ですっかり酔いが覚めてしまったらしく、

皆刀を手に立ち上がり、ある浪士は二階である窓から飛び降り、またある浪士は

勇敢に立ち向かってゆく。

部屋の外へ出て行くと、そこはもう地獄絵図のように恐ろしく血で染まっていた。

血のりなんぞではなく、紛れもなく本物である。

むせかえるぐらいに濃く漂う匂いにをかいたことのないカンナは胃から上がってきた

ものをぐっところえた。

何人もの人間が、犯罪と言われる殺人を平気で行っている。

変な感覚である。しかし、自然と恐怖は湧いてこなかった。

カンナの心に湧いてくるのは、哀しいという感情だけだった。

現代では、哀しいと言うよりも醜いという言葉の似合う人間が多かったが、

この幕末の時代は、哀しい者ばかりであると。カンナには、人を斬るときの目が泣いているようにしか見えなかった。

皆、同じ目をしている。

現代には、歴史が面白い。だとか、武士はかっこいいなどと軽口をたたくものが

居るが、武士とは歴史とはそんなに軽いものではない。

酷く辛くて重いものなのだ。

この時代では、刀を振るう者皆、殺したという罪悪感を背負って生きている。

ならば、その罪悪感の重さを少しでも軽くしてやりたい。

カンナはそう思ってしまう。

ゆっくりと手元の刀を抜き、なかなか出なかった足を前へ出した。

カンナは、彼女を仲間だと思っていた浪士を思いっきり斬りつけた。血しぶきが上がり、新品の着物に染みる。

人を斬ることに、少々ためらいは有ったが、一度斬ってしまえばそうでも無くなってしまった。

冷たい人間だとカンナは自分で思う。

しかし、カンナはほとんど浪士を斬っていく。

彼女の瞳に暖かみなどありはしない。

冷たいが、それでも尚美しい瞳がそこにはあった。

・・・

「総司!!! しっかりしろ! 総司!!!」

突如、心配するような哀しい声が響き渡った。

カンナは、本で読んだことがあった。

新選組1番隊組長沖田総司は池田屋事件の最中、喀血し倒れたのだと。

助けなければとつさに沖田の元へと駆けつけた。

声のする方へ行ってみれば、浪士の死体が床を埋めていたが、その中に

一人だけ浅葱色の羽織を羽織った若い男が倒れていた。

彼の手が血で染まっている。

喀血する際、手で口を覆ったのだろう。

・・・となれば、あれは確実に沖田である。

近くには、何度も何度も沖田の名を呼ぶ大柄の男が彼を守るように立ちはだかっている。

見たところ、年齢的に新選組局長である近藤勇だろう。

「局長ですよ。沖田さんはあたしがしっかりと外まで運びます。避けてはもらえないでしょうか？」

カンナは、斬られるという最悪の場合も想定して向かった。

「し・・・しかし！」

「お願い。あたしを信じて。あたしが沖田さんを守ってみせる！」

近藤も考えてる暇なんて無い。

沖田も、ずっとここに倒れていては、浪士に不意を突かれ斬られてしまう。

「・・・わかった！！任せたぞ！！」

「はい！！！！」

カンナは、沖田を担いで引きずる。

沖田が若く20代だとしても、もう男であって身体も大きく、重い女にはきつい仕事だ。

それでも、浪士を斬りつけながら必死に出口へと向かって歩いた。自然と汗が滲み出し、息が上がる。

しかし、気にする暇など何処にもなかった。

カンナはただ、皆が無事で会って欲しいと願うばかりだ。

面識もない人たちに入れ込むなど珍しいとカンナはつくづく思う。

ようやく池田屋をでたところ、カンナは驚いた。

最初から来ていると思っていた隊士達が居ないのだ。

だとすると、今現在ここではカンナを含め、新選組は11人ということになる。

カンナの知る歴史では、確かに今と変わらぬ状況なのだが、

彼女は池田屋であると事前に知らせたはずである。

何故来ていないのか。

そして、経った今戦っているのはわずか6人だ。

カンナ、沖田、それから今頃は3人の隊士が怪我を負って動けないはずである。

あと、どれくらいで応援はやってくるだろうか。

沖田の様子を確認しながら待っていた。

舞い込んだ蝶 其の参

カンナは連れ出した沖田を置いていける筈もなく、
沖田のすぐ隣りで足の先をぱたぱたと上下させている。
まだかまだかと待つばかりである。

ふと、遠くに大勢の足音を聞き、やっとかと音のする方へ身体を向けてみれば、
その足音は新選組の応援ではなく、会津藩、桑名藩の応援だ。

先に来るのは新選組のはずではなかったか？等と思いながらも、
カンナは焦っていた。

このままでは新選組ではなく、会津藩らの手中に手柄はおさまってしまう。

この状況は、カンナ一人で引き留めなければならなかった。

・・・さて、どうしたものか。

とにかく、カンナは池田屋の前に立ちほだかるようにして仁王立ちした。

何も言うことなど決まっては居なかった。

下手をすれば、斬られてしまう可能性だって無いわけではない。

しかし、この場に新選組隊士が誰一人としてこちらに手が回らない以上、

何とかするしかない。

特に新選組に義理立てするようなことはされていないが、

ただ、興味があった。

カンナの先祖が居る新選組に。

先祖がどのようにして新選組で働いてきたのか、どんな人だったのか

どれだけ剣術が強かったのか、気になった。
そして、このカンナの持つ刀の持ち主でもあるため、一度でも良いから

話してみたかった。

藩の応援で来た大勢の兵がカンナを前にして立ち止まった。
一番前で兵を引き連れている人物はなかなかの巨漢でさらにかなりの
コワ顔だ。普通ならば、後ずさりしているところだろうが、
そんなわけにはいかない。

「その女、我らを通さんか。」

この男は、声もでかく、低かった。

迫力がある。兵を引き連れ上に立つだけの力はあるのだろう。

しかし、カンナは怯まずに真っ直ぐと睨みつける。

「嫌よ。あんたらを入れるわけにはいかない。」

これは平和に対処したいものだ。

せめて冷静に堂々としているべきだろう。

ここで縮みこまってしまえば、完全に押されてしまう。

それは避けたかった。

「我らは会津藩の者であるぞ。」

「ふーん。だから？・・あんたらねえ、こん中の状況知らないでしよう。」

今、この中では激しい斬り合いが続いてる。

敵か味方かなんて見分けてる暇なんて無いの。判断出来るのは、あ
の新選組の

象徴である浅葱色の羽織だけ。

あんたらがそんな普通の格好で入っていったら、敵だと見なされて斬られるだけ。

分かるかしら。まあ、無駄死にはしたくないでしょうからここで待機よ。」

巨漢はグッと黙り込み、唇をかむが負けを認めたくないのかまだ、無理矢理なことを吐く。

「しかし、・・戦力が足りぬのではないか？ たった10人で討ち入ったと

聴いていたのだが。」

「ええ。10人ではいつてったわ。でも手助けはいらないわよ。なにせ、隊の中でも優秀な幹部が揃ってるもの。

あんた達が入っていったとしてもこんな小さな宿だもの。

邪魔になるに決まってるわ。」

会津藩らはどうしても手柄を取りたいようだ。

しかし、カンナがそれを許さない。

冷静でいたいと思っているカンナも少々いらついてきている。

「大人しく待機してなさいよ。

それとも、そんなに手柄が欲しいの？

・・・だったら、何処よりも早く駆けつけなさいよ。

あんたらにこの件の手柄を取る資格なんてない。

遅れたんだから。

・・・とにかく、今回はあんた達の仕事はない。
あるとしたら、後始末ね。」

カンナは透き通った瞳で睨みつけ、兵が地面に座り込むのを確認してから

辺りを見回した。

兵達が座り込むと目の前の景色がスッキリとした・・・と思えば、既に新選組の応援は兵の後ろに来ていた。

カンナは気まずい空気から逃れようと再び池田屋内へと歩き出した。

「待て。女子が何だってこんな所にいる？」

カンナは目でその声の人物を捕らえると、

その人物は、カンナが会いたいと願った者だった。

あのひとである。

写真では服装も髪型も年齢も違っていたが、やはりあの新選組の副長である土方歳三だ。間違いは無い。

この者はカンナの先祖に当たる人物であり、彼女の持つ刀の持ち主でもある。

「・・・貴方に・・・会うためです。」

それだけを言って宿内へと入る。

沖田の事は、もう心配ないだろう。

カンナの後から応援の隊士達がぞろぞろと入ってくる。これで安心だ。

・・・と思い刀を抜くと、一人の若い隊士がカンナの肩を叩く。

「あの、これ副長が貴方にと。」

そう言って手渡されたのは、無造作にたたまれた浅葱色の隊服だ。
受け取るとまだ暖かった。
先ほどまで土方が来ていたものなのだろう。

「ありがとう。」

さりげなくお礼を言って羽織を羽織った。
少し大きくぶかぶかな気もしたが文句は言えなかった。
羽織ると、ほのかに懐かしい香りがした。
それは、祖父が良く焚いていた香の香りだ。
木の良い香りがする香で、カンナはそれが好きだった。
そんな香りのする羽織を血で汚すのは気がひけたが、
浪士が斬りかかってきたため気にする暇は無かった。

そうして、夜は明け新選組の隊士では1名が死亡、5名が重傷を
負い、
その中の2名は重傷により後に亡くなる事になる。

この事件はカンナの予測した通り「池田屋事件」と呼ばれた。

蝶の正体

池田屋事件が幕を閉じ、新選組は大手柄だ。

カンナは池田屋で何人もの人を斬った。

刀は瞬く間に血に染まり、血を吸った。

人を斬るといふものは、殺すといふものは気持ちの良いものではない。

しかし、斬らねばならなかった。

そういう状況にあったのである。

今、カンナは池田屋から出た。

討ち入りのあったこの宿は酷い有様だ。

障子が破れ、血しぶきの痕を残しているのは勿論のこと、宿内は死人の山で溢れ、刀傷が壁に刻まれている。

更に、勝手場の飲み水はあかく染まり飲めたものではない。

こんな幕末の時代であるが故にこのような光景がある。

カンナはその光景を目に刻みこんだ。

忘れてしまいたくは無かったのだ。忘れてしまつては、勇敢に戦い続けた者が

浮かばれぬ。そう感じた。

カンナは血に濡れた刀の剣先を真っ直ぐと空へ向け、池田屋に掲げる。

そんなカンナを土方歳三はただひとり見ていた。

刀を掲げるカンナは歳三の目に美しく映った。

刀を振っても尚乱れぬ結い上げた金の髪、そして意志の強さを含む金色の瞳、

哀しげな横顔が朝日に照らされ、数段艶やかになる。

血で赤くなった姿は鬼の姫とも言えるまでの強さと美しさ、それから武士の誇りがそこにはあった。

歳三は息を飲んだ。

それほどまでにカンナの放つオーラは偉大であった。

カンナが刀を下ろし、ため息が口から出た時、

歳三はふと疑問を口にした。

「お前、ここに居るのは俺に会うためだと言ったな。何故だ。」

「貴方を尊敬しているから。・・・」

歳三は、また恋か・・・と思ってしまう。

しかし、カンナの話はまだ続いていた。

「私は、確かめたかった。貴方がどんな人で、どんな風に仕事をこなしているか。

噂なんかじゃなくてこの目で確かめたかった。」

カンナにとって、確かに歳三は尊敬に値する人物だったが、歳三の性格や趣味、仕事は正確には現代に残されてはいない。

故に自分で確かめなければ、納得がいかぬのだ。

「何故、この池田屋に出入りしていた？」

質問攻めであるが、特に嘘を吐く必要もなく、淡々と応える。

「無理矢理連れてこられて、でも、じきに貴方がここに来ると思っただから。」

「・・・ここで、隊士の方に会合の事を知らせただけど、伝わらなかったみたいね。」

「全く知らねえ女を信じるわけねえだろ。」

カンナの伝言は確かに伝わっていたが、信じてもらえなかったということだった。

カンナは思った。これは、当たり前ではないか。

・・・ひとを一番信じていないのは自分ではないのか。

自分がひとを信じていないのに、自分に対しての信頼を求めるのは間違いではないか。

「・・・そうね。」

「ああ・・・。まあ、とりあえずお前の話をもっと聞きたい。」

だが、そっちも色々と用事があるだろ。今日は良く寝て、明日中に新選組屯所に

来い。俺が居ないようなら、誰か幹部が居るはずだからそいつに頼んで待たせてもらえ。」

歳三の申し出はカンナにとって嬉しいものだった。

しかし、少し困ることがあった。

金はないし、着物もこの血で汚れたものしかない。

つまり、泊まる宿も無ければ、着るものもない。

「・・・は・・・い。」

これはどうにかするしかないだろう。

こんな治安の悪い京で野宿なんてしてしまえば、何が起こるか分からない。

そして明日までに着物を調達しなければ新選組屯所になど行けそうにない。

カンナは新選組から離れ、朝日が照らす道を歩いた。

・・・カンナとしては、小学校の劇やら演技などは好まなかったのだが。

カンナは人の良さそうな女性が入っていた茶屋に目を付ける。

そして、バンバンと戸を叩き・・・

「お願い！・・・ったすけて！！誰か！！！！！！」

なかなかの演技だ。

これならば、だれも疑いはしないだろう。

カンナの取り乱した声と行動に、さっきの女性が急いで出て来て、カンナの両肩をつかんだ。

「あんた、どしたん！？・・・っとりあえず、入りい。」

カンナは女性に守られるようにして家の中へ上がった。
・・・これがカンナの取った一番手っ取り早い方法だ。

カンナは、小さく息を吐いた。

大物女優カンナ

カンナは、しくしくと涙を流し、ある家に上がっていた。

「大丈夫や。・・・」

正体の知れないカンナを家に入れる親切な女性は、カンナの背をさすって

なだめていた。

「怖かったやろねえ・・・。あないな所に巻き込まれはって・・・。」

カンナは再び嗚咽を漏らし、泣き始め、頷く。

暫く泣きやまず、仕舞いには、女性に優しく抱きしめられる。

しかし、この抱きしめられた時は演技でもなく、本当に泣きそうになった。

こんなにも優しさを近くに感じたのは初めてだった。

だから、なるべく長く優しさを感じていたくて暫く泣きやまない事にした。

・・・ようやくカンナは満足し、泣きやんだ。

「・・・ご迷惑・・・おかけして申し訳・・・ありません。」

「そんなこと、いいんよ。全く、・・・壬生浪も祭りの日ぐらい、静かにしとったらええのになあ。」

6月6日は、祇園祭で人が賑わっている。

住民としては、騒ぎを起こさず、祭りを楽しみたいのだろう。

祭りの日に騒ぎが起こっては、外へ出ることも避けたい。

祭りどころではない。

「・・・あの、・・・実は私、池田屋で住み込みで働いて・・・頼れる人も・・・ついでなくて・・・」

「そうやったの。・・・そや。うちに暫く居たらええ。ちゃんと、仕事もあるんやさかい。」

カンナは思い通りにことが進んでホッと安心する。

「・・・では、・・・本当に暫くの間だけ、よろしくお願い致します。」

私は、名を敢菜かんなと申します」

カンナが頭を下げると女性は元氣の良い笑顔で声を張った。

「あたしは勝かついうのんや。よろしく。あんたはべっぴんやから、商売繁盛しやはるんやないかね？」

この女性の笑顔には、人を元気づける力がある。

カンナは自然と自分も笑顔になっていることに気が付きはしなかった。

現代では笑わないカンナが、この時代ではいとも簡単に笑顔になる。そんなこの時代は、純粹に綺麗だと言えるのではないだろうか。

嘘は、どんな時代にもあるものだが、現代よりはずっと少なく
また、人の笑顔は輝いている。
笑顔だけは、偽りのないものだった。

カンナはこの掛茶屋^{かけぢや}で働くことになった。

掛茶屋は、宿のようなもので料理や酒も出している。
着物は勝のものを頂いた。

お古であるらしいのだが、随分と新しそうに見えた。
柄も色も鮮やかで勝のものではないような気もしたのだが、聞きは
しなかった。

カンナは初日から、急きよ料理を頼まれてしまい、少々この時代特
有の

火の扱いに戸惑ってしまったが、何とか作り終えた。
それを客に出してきた勝は、ニコニコとしている。

「敢那ちゃん、ありがとうねえ。あの煮物が評判ええんやわ。
これからも色々作ってくれはったら嬉しいんやけど。」

カンナは嬉しかった。

人にこんな風に必要とされることが、こんなにも嬉しいとは思いま
しなかった。

涙が出そうだったが、泣くところではないとこらえる。

「はい。作らせてください。」

カンナは、この時代に来てまもないうちに着物の着方を覚え、火の扱いも慣れ始めていた。
こんなに早く慣れるものなのかと思っていたが、早く慣れるのはありがたい事だった。

ガラス玉

池田屋事件のあった次の日のこと……。

カンナは道に迷っていた。

（……ここは……さっきも通った……かも？
……新選組の屯所って何処お??）

カンナは、頭を抱えて行ったり来たりを繰り返していた。

そんな様子を見ている人々は確かに大勢居るのだが、誰一人として声を掛けてはくれない。

それは、カンナが異常な変わり者だからだ。

外見が異人なのに着物を着こなし、更におなごなのに刀を持って歩いている。

まさかおなごが刀を抜くとは思っていないだろうが、やはり、近づきたくはないのだ。

（ん?……そっか。この頃の屯所って、壬生寺の近くだって本に書いてあったな。

……うん。壬生浪^{みづろう}って呼ばれてるぐらいだし。
これぐらい聞け。……一言ですむはず!）

カンナは気合いを入れて周りの人に聞こうと気合いを入れた。

「あのお、すみません……。」

カンナが声を掛けたのはいかにも気の弱そうな商人だったのだが、

逆に絡まれるよりはましだと思ふことにした。

その商人は肩をふるわせたが、逃げずに対応してくれた。

「壬生寺って何処にあるか分かります？」

カンナの普通のおなごの問いかけに安心したのか、
分かりやすくゆっくりと説明をしてくれた。

カンナはお礼を言って、説明を受けた方向へと歩みを進めた。

説明の通りに歩いていくと、あっという間に壬生寺に着いてしまった。
た。

こんなに簡単で良いものかと思ってしまうのだが・・・。

そんな時、境内の方から子どもたちの楽しそうな声が聞こえた。

カンナは子どもが好きだった。

大人は嘘が多くて汚いが、子どもはまだそんなことを知らなくて純
粋だからか、

一緒にいると安心できて、汚れた社会のすすで汚れてしまった自分を
綺麗に癒してくれる。そんな感覚があるのだ。

カンナは声のする方へと向かい、子ども達の姿を見た。

そして、先ほどは陰になっていてわかりずらかったが、

子ども達の輪の中には池田屋事件の際にカンナが外まで担いでいっ
た、

沖田総司が居るではないか。

咯血して倒れたというのに、翌日にはもう既に子どもと走り回って
いる。

何という回復力だろうか。

しかし、本当に回復しているのだろうか・・・。

カンナは気になって声を掛けた。

「こんにちは。・・・ねえ、あなたたち、今日の所はこれぐらいにしてくれるかな？」

・・・このお兄さんね、疲れちゃってるの。今日ぐらい、休ませてあげて。」

子ども達は頬を膨らませてカンナを見る。

「・・・じゃあ、今日は私と一緒に遊ぼう。お兄さんが元気になったら、もっと楽しく遊べるよ。」

子ども達は、納得してカンナの手を引っ張った。

沖田は首をかしげて不思議そうな顔をしているがカンナはそんな視線を無視した。

カンナと子ども達だけで遊んでいれば、沖田も帰ると思ったのだが、子ども達が帰るまでずっと座って見ていたようだった。

子ども達は、カンナが気に入ったのか満面の笑みを見せ、カンナの取り合いまで

始めた。しかし、カンナはそれを沈めて見せた。

カンナの子ども達に向ける柔らかい笑顔は安心感をあたえ、人を良く寄せ付けた。

そんなカンナに子ども達はまた遊んでと言った。

子ども達が帰って、沖田はようやく立ち上がった。

「君、子どもの扱いが慣れてるんだね。」

沖田は人を殺すとは思えない程優しい笑顔を向けた。

「慣れているというか、基本的に子どもが好きで。だって、子どもは純粋で嘘がないから。」

沖田は「そう。」「とさりげなく返した。

「それより、昨日倒れた人がこんな所で遊んでるなんて・・・。全く・・・怪我人が何してるんだか。」

カンナは呆れてため息を吐く。

あえて、病人とは言わなかった。

沖田は、下を見て苦笑いをした。

「もう・・・君も過保護かぁ。しょうがないなぁ。

屯所に行くんでしょ。一緒に行こう。これなら、いくら方向音痴の人でも

迷わないよ。」

沖田には、カンナが迷って何とか壬生寺にたどり着いたことが分かっていた。

沖田は妙に鋭い所がある。

だからだろうか。子どもとの駆け引きが上手い。

沖田とは、屯所までの短い時間で随分と話し込んだ。
それでカンナには沖田の本質が見えた。

沖田は、史実上の通り好青年だ。

そして、良く人をからかう所があるが、本当は仲間思いで子どもにも好かれる

綺麗で透き通った心の持ち主だ。

そんな彼が、刀を手に入れば鬼へと化し、稽古でも隊士をめった打ちにするというのだから

何とも恐ろしいものだ。

鬼

「着いちゃった。・・・ここだよ。おいで。」

カンナは沖田の後をついて行く。

しかし、なんだか先ほどから視線を何度も感じていた。それは、平隊士達のものであった。

全く女に興味を示さなかった沖田が美しい、しかも異人の女を連れてきたのだから

驚いているのだろう。

沖田は機嫌が良さそうにニコニコとしながら前を歩く。

隊士達の視線は全く気にもしていないようだ。

そして、カンナが沖田と共に屯所内を歩いていると、どこからか異様な殺気を感じ、それと同時に隊士達はさっさと逃げていった。

沖田も面倒臭そうな顔をして足早に歩き出す。

カンナはそんな行動の理由も知らないままとにかくとついて行く。

すると、後ろから殺気を持ち主の怒声が響き渡る。

「総司!!!! てめえ!どこ行ってやがった!?!」

「・・・っこわ・・・」

沖田は冷や汗をかいてつぶやき、急にぴたりと止まった。

カンナは止まっては欲しくなかった。

怒声は今までに出会ったこともないくらいの怖さだ。

なるべく真っ向から受けたくはない・・・そう思っていたのだ。

怒声を発する男から守るように沖田はカンナを自分の背で隠した。完全には隠れきれなかったのだが・・・。
そしてついに目の前に恐ろしい男がやってくる。

「ほらほら、この子怯えちゃってるじゃないですか。
もう少し穏やかになってくださいよ。・・・ね、土方副長。」

カンナは初めて知った。
この恐ろしい男があゝの土方歳三なのだと。
そして、自分の祖先なのだと。
カンナは震えていた訳ではないのだが、
ついに思った事を口に出してしまった。

「はあ・・・。。。。。。鬼・・・かあ。」

「ああ!？」

歳三は眉間に皺を寄せ、沖田を避けようとするが沖田は決して避けようとはせず、
そのまま笑い出した。

「言われちゃいましたね。やっぱり、あんた鬼なんですよ。」

沖田が笑うと、歳三の眉間の皺は消え去った。

歳三は怒るところか、苦笑いをして腕組みをする。

「さて、お前の後ろにいる女は誰だ。」

歳三は気づいていない。それとも忘れてしまったのか……。

「嫌ですねえ。あんたがこの子と呼んだんでしようよ。」

沖田が言って歳三はようやく気づく。

この女は自分が来いと言いつけたあの何処が変わった女なのだと。沖田は、はっとした歳三の様子を見てすつとカンナの前をどいた。すると、確かにあの時の勇敢で歳三に忠実だと物語っている瞳がそこにはあった。

「そうか……。すまねえな。」

本気で謝る歳三を見て笑う沖田だったが、視線が急に自分へ向けられるとは予想していなかったらしい。

「だがな、総司。……お前は体調も万全じゃねえのにいったい何処をほつつき歩いてやがった!？」

シュンとしてカンナに謝っていた歳三の顔は同一人物とは思えないほどに鬼の顔へと変化していた。

しかし、カンナはひとつ確かなことを発見した。

歳三は曲がったことを嫌う性分であり、更に頭も回るらしい。さぞ、信頼度も高いことだろう。

故に、隊士達はこの歳三が鬼であり、恐れているものであったとし

てもしつかりと

歳三の後についていくのだ。

暫くして沖田への説教がすんだとき、歳三は腕組みをしながらカンナに目を向けた。

「そーいやあ、名を聞いていなかったな。俺は、新選組副長を務める土方歳三だ。」

「かなな
敢菜です。」

カンナは簡単に名だけと言う。
そして、カンナは副長室へと案内され、そこで色々と話を聞かれる事になった。

歳三はというと、何故この女を呼んでしまったのだろうかと自分の行動に疑問を持った。

今まで女にそこまで興味をそそられなかった歳三だが、今回だけは
この異人の様な美しい女に
興味を抱いた。

何故この女はこんなにもそこらにいる町娘と雰囲気がかき離れているのだろうか。

そして、何のためにこのような線の細い女が刀を手にし、勇敢に戦うのだろうか。

どうやって、監察方の隊士を見破り自分に会合の場所を伝えたのだろうか。

・・・などと、歳三の頭の中は疑問でいっぱいであった。

武士

カンナは、今、あの鬼の部屋ですつと背筋を伸ばし、座ったところだ。

先に座り、カンナの様子を見ていた歳三は、どこか違和感を感じていた。

カンナが自分の左側に刀を静かに置く仕草は本物の武士よりも武士らしい何かがある。

ただの女ではなかったのか。

「さて、お話・・・とは？」

カンナは歳三の目を真っ直ぐ見て先手を取った。

歳三もカンナの目を真っ直ぐと見ている・・・というよりも、睨みつけている。

歳三は見極めているのだ。

カンナが信用できるか出来ないかを。

そして、敵か、味方か。

「お前は、俺に会うために池田屋に居たんだったな。

どうやって、潜入した？ あそこはあの日、貸し切りで他人のお前には入れなかったはずだ。」

「巻き込まれたのよ。桂小五郎に無理矢理連れていかれたの。」

カンナは、桂の顔を思い出し、深くため息をついた。
もう、祖先だろうが、何だろうが敬語は嫌になってしまった。

「やっぱり居やがったのか。・・・だが、なんだって敵か味方かわからねえ奴を・・・。」

「・・・ただ、珍しかったんでしょ。私が・・・。」

カンナは結い上げた金色の髪を撫でた。

やはり、この世界で、それも日本で、この容姿は異質なのだ。
日本人でもあり、イタリア人でもある。

外国を打ち払おうと言っているこの幕末で、カンナのようなハーフな
ど居るだろうか。

居るとしたなら、きっと周りからは色々と言われていることだろう。
なんだか空気がしんみりとしてしまい、カンナは話を変えた。

「ああ、ところで私ね。今、池田屋の近くにある藤ってお茶屋で働
かせてもらってるの。」

良かったら、そのうち寄ってって。私の作る自慢のご飯、食べさせ
てあげる。」

カンナは自然と笑顔になっていた。

少し血の臭いが漂っているけれど、この幕末の世はあまりにも綺麗
だから。

それに、少し懐かしい気がするの。この町の雰囲気とか。

カンナはこの時代に來たことを嬉しく思った。

「藤？・・・ああ、あのちいせえ茶屋か。時間があれば、寄ることにする。」

「うん。・・・あと、私いつでも新選組の力になるから。もし、力が必要になったら声かけて。」

カンナは新選組が好きだ。

脱藩者や百姓、町人の多い新選組だが、金を稼ごうと考えていようが、お上の役に立とうと考えていようが、どちらも同じ。自分にとって大切な者を守ろうとしている。

そういう所が好きだ。

よほど想っていないければ、規律が厳しく、さらに多く危険が伴う新選組には入らないだろう。

一人一人が命をかけて大切な者を守っているから、だから手を貸したいと思う。

輝き

カンナはあの後、歳三と少し話して、早々と部屋を出た。未来から来たことを言ったりはしなかった。知られてもどうにもならない。

ただ、混乱するだけだ。余計な事を聞かれる前にカンナは歳三から離れた。

しかし、わざわざ離れたのも無駄になった。

「おい、結局お前は何者だ？」

歳三がカンナを追いかけてきたのだ。

「私は………わからない。
………ただ、貴方と一緒に戦いたい。貴方の役に立ちたい。」

カンナにとって、歳三はただ一人の信じられる人だった。親もクラスメイトも誰も信じられなかった。だけど、歳三だけは信じられた。

何故かは、自分自身でもわかってなどいないのだが。

「だからお願い。信じなくてもいいから少し位頼って。」

わかってる。矛盾してるって。

でも、信じろなんて私が言う資格ないの。

だけど、私は誰かに必要とされたい。

今まで、必要にされたことは無かったから。

カンナの必死な目に歳三は息を大きく吐く。
そして、笑ったのだ。

「何言っただ。信じねえか信じるかなんてお前えの行動しだいだろうが。」

信じられる努力をしろ。」

カンナにはわからない。

「努力?・・・?」

「ああ。まずは己がひとを信じねえと始まらねえ。」

そう言って笑う歳三の顔は清々しくてこれから先の未来は上手いくように
思えた。

「ありがとう。・・・トシ。」

急に親しく呼ばれ、歳三は少し戸惑ったが、カンナが笑って歳三を
見ているから
良しとした。

・・・と突然、どこからか明るい声が聞こえた。

『あ、土方さんが女の子くどいてる。』

そして、二人が歳三の背後へと視線を向ければそこにニコニコとした総司が幼い子どものように可愛らしくピヨコリと現れた。

「そ『そんなことあるわけじゃない!』・・・は?」

歳三がそんなことはないかと否定する前にカンナがバツサリと完全否定した。

「だって、トシよ?こんな不器用な男が女の子を口説くなんて信じられないでしょ。」

「っていうか、それ以前にトシがそんなことしてたら気持ち悪い・・・」

カンナは本気の顔で言った。

総司は笑いをこらえ、歳三はヒクツと片頬を引きつらせた。

そんな二人の反応にカンナはきょとんと首をかしげる。

その行動が歳三をまた怒らせる。

「誰が・・・気持ち悪いだってえ???・・・」

カンナと総司はただならぬ殺気を感じたために急いで走り出した。

それに歳三は大声を上げる。

カンナは声を出して笑った。

何年ぶりだろう。こんな風に大声で笑ったのは。
すぐく気持ちがいい。賑やかで楽しくて、いつまで私は彼らと共に
居られるのだろうか。
ずっとこんな風に笑って居られればいいな。
そう思う。

遠くである三人の男はカンナと総司と歳三の様子を見ていた。

「誰だ？あの子？左之、知ってるかあ？」

「ああ？知らねえよ。」

「・・・にしてもさあ、すごい綺麗なひとだよなあ・・・。
見たことねえぜ。」

そして、三人は最後までカンナ達の様子を見届けたのだった。

刀

カンナは暫く新選組屯所に留まっていた。

帰ろうと支度をしていた所、一人の男に声を掛けられたのだ。その男は斉藤一といって、有名な新選組の副長助勤である。カンナの持ち歩く一振りの刀が気になったらしい。断る理由もなく、仕方ないが刀を見せる事にした。

一はするりと刀を抜きじつくりと目を凝らして柄から切先まで丁寧に見ていく。

「かなりの年代物だが、素晴らしい大技物だ。・・・これは・・・兼定か？」

一は、刀一筋ではないのかと思わせるほどに。

「あたりよ。・・・それにしても見る目があるのね。

貴方自身の刀、国重も流行してはいないけれどしっかり自分に合ったもの

みたいだし。自分に合ったものを見つけるのは難しいのに。」

一は黙ってしまう。

しかし、やっと口を開く。

「あんたは、刀が好きか？」

「嫌い。」

カンナの早い応えに一はふっと笑う。

そして、視線で更に深く問いつめてくる。

「・・・刀は・・・人を殺すための道具だから。
それに、刀は綺麗すぎる・・・だから嫌い。」

一は何を思ったのかは知らぬが、なにやら顎に手を添えて考え出した。

そんな一を見て、カンナは小さく笑った。

「でも、好きでもあるの。」

すると、意味がわからないとでも言いたそうに眉をひそめる。

「刀は、私を裏切らないでしょう？」

そのカンナの答えに一は一には似合わぬイタズラ小僧の様な笑みを浮かべた。

同時にカンナの手の手平へと刀が戻ってきた。

「俺は斉藤だ。あんたの名は何と申す？」

「敢菜。勇敢の敢に菜の花の菜とかくの。」

本当はカタカナでカンナとかくのだが、この幕末ではカタカナは通じない。

単なる当て字だ。

「敢菜か。覚えておく。」

そう言って一は去ろうとしていたが、カンナはひとつ気になっていた。

「刀が好きか」と聞いていた彼の目が酷く哀しい物に見えて……どうしてもそれを見ぬふりなど出来るはずも無かった。

「あなたは？ 刀は好き？」

一は苦しげに目を細め、風の音が聞こえてくるほど静かに言う。

「気に入らぬ。……何もかも。」

カンナは思った。

彼は私と同じだ。人を信じられず、常に人を疑って生きている。

そして、彼と私の違う所は人を斬った数。

乱世ですつと過ぎしてきた彼は、数えられぬ程の人を斬ってきたことだろう。

自分の感情をどこかにおとして、冷酷にためらいもなく斬る。

彼は刀のように鋭くて冷酷なように見えてしまうが、本当は違うのだろう。

感情を心をどこかに忘れてきてしまっただけで。

いつか、本当の彼と向き合うことが出来るのだろうか。

私は向き合ってみたい。

本当の彼は熱く、優しい心の持ち主だとそう、直感しているから。

記憶の言葉

ーおかえりー

かつさんの、そんな一言が私の心を暖かく包んだ。
何処でも聞く当たり前の言葉の筈なのに。

何故？

その答えは私に向けられた言葉ではなかったから。
でも、今のは自分に向けられているもの。

ーただいまー

私はその言葉に応じて当たり前に返した。
自分の口からこの言葉が自然と出たことには驚いた。
自分では経験していなくとも、周りの常識が身体に染みついている
のだろう。

この世界に来てからというものの、新鮮な感覚ばかり。
でも、暖かい町の雰囲気は何処か懐かしかった。
どこかに似ている。

・・・あぁ・・・祖父の家だ。

祖父の家に行ったことなど一度しかないが、見渡す限り現代的なビルなどが立ち並ぶ

東京の中心部に、ちょこんと寂しく建っていたのを覚えている。そこだけ、今のような雰囲気があった。

周りの雰囲気は冷たいだけに、その家は暖かく感じた。

しかし、家の中には誰の気配もしない。家の奥には確かに息をして床に伏せる

祖父がたった一人居たのだが。

息絶えそうな祖父が目を向けて寂しそうにため息を吐いた。

祖父が見ていたのは、簡素な部屋に不釣り合いな一振りの刀だった。随分と柄が擦り切れ、汚れてしまっただけだがそれにはただならぬ存在感があった。

同時にここにあるのはおかしいと直感した。

「持ってゆきなさい・・・」

祖父は私に刀を託そうとした。

息絶えそうなのに声を必死に出してまでして。

「お前の父になど託せぬ。・・・それはあの土方歳三の刀・・・
いずみのかみかねさだ
和泉守兼定という大業物だ。」

驚いた。

土方歳三といえば、有名な新選組の副長で、最後まで指揮官として戦ったすごい人。

そして、世間では悪者扱い。

それは、新政府軍が勝ってしまったから。

最近の新選組に人気が出てきたけれど、それも本やゲームのなかの新選組で、けっして本物ではない。

「覚えておきなさい……。お前は土方歳三の子孫にあたる。誇りをもって生きなさい。」

子孫？

あてにならない。そう思っていた。

けど、信じざるを得なかった。

何故かという、祖父の家には土方歳三の姉に送った文や、これはどうかとも思うが、

歳三宛と思われる恋文が山のように押し入れのなかで眠っていた。

勿論、歳三の句集もあった。そして、刀。

揃いすぎていた。何もかもが。

戸籍だって頼んで調べて貰った。その結果は確かに同じで、信じるしか無かった。

刀は祖父から貰い受け、いつも傍に置いた。学校でも気にせず身近に置いた。

銃刀法違反なんて、無くなったようなもので、同じように法律も条例も意味をなさなかった。

私が刀を貰い受けたのは世界が終わるちょうど一年前だったから。武器でも持たないと外も歩けない。安心できない。そんな狂った世の中に成り果てていた。

そのうち、学校も停止になった。

私は家族も飼い猫もお金も大切な物も手放した。けど、剣道だけは、兼定だけは手放さなかった。

剣道は心の支え。いつも傍にあった。

剣道は私の身体の一部だから。生きてさえ居れば、必ず私の後につ

いてくる。

だから、生きたいと願った。

まだ、兼定と共に有りたいと。剣道を手放したくは無いと。

・・・・・・そうだ・・・・・・

ここへ来る寸前、誰かの声が聞こえたんだっけ。

心に響き染みいるような低い男の人の声だった。あそこには誰もいなかったはず。

・・・・その声を聞いたとき、胸が激しく高鳴って、何かの残像のような記憶のようなものが頭に流れたんだ。

それは、私の記憶になどないものだった。

その記憶は残酷なもので、一面が兵と彼らの血で埋め尽くされていた。

そんな風景の真ん中でたった一人の刀を持った男の人が立ち尽くしていた。

その人は涙を流し、血に染まった胸に手を当てていた。

悲しさと寂しさ、そして悔しさに満ちた光景。知らぬ間に私も涙を流していた様な気がする。

「俺はこのような所で死なんっ・・・・。必ず・・・・貴方のもとへ・・・・参りますっ・・・・」

その人の瞳にあったのは純粹な忠義。

そして、もう一つの記憶。

先ほどとは違う男の人で、迫り来る敵を次々と斬り捨て、必死に前

を見て進んでいた気がする。

「俺は・・・何のために人を斬ってんだ？・・・もう、守ってやる奴もいねえっていうのによ。」

その人の瞳には怒りと悲しみ。

戦の中で自分の道を見失ってしまった男の姿だった。

その姿を見たとき、自然と私の口から誰かの名が出た。

その名が何だったかは全く思い出せないのだが、きっとその人のことだろう。

不思議だった。

自分の中に全く覚えのない記憶があることに私自身が驚いた。

その記憶とその中の男達の言葉に何の意味があるのか、何を伝えたのか

答えは出ないままだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1333t/>

北へ・・・

2011年11月18日06時15分発行